

# レジャー志向性尺度の開発： 成人女性サンプルによる尺度の有効性の 検討と旅行行動への応用

心理学部ビジネス心理学科 佐橋由美

抄録：本研究の目的は、2006～07年に開発に取り組んだレジャー志向性尺度（試作版、2006；改定版、2007）の安定性、実際場面での使用を想定した使い勝手のよさや現象解析力などの有効性について検討することであった。これまで学生を対象として、尺度の有効性を評価する作業を進めてきたが、本研究では、学生も含め20歳以上、70歳代までの幅広い年齢層の成人女性にまで対象を拡大して調査を実施し（ $N=228$ ）、志向性尺度の因子構造の安定性やレジャー現象を的確に解明しうる分析枠組みとしての効能（判別力）等、有効性の問題について検討した。さらに今回、志向性尺度を“旅行”という新たなレジャー文脈のニーズ把握や行動予測に応用することにより、尺度の新たな意義を探る試みも行った。32の志向性項目を因子分析した結果、先行研究と同じく（1）長期的展望・向上（2）活動性（3）主導性（4）対人関係志向（5）利他主義（6）自然志向の6つの因子が抽出され、下位尺度の内的一貫性も十分に高かった（ $\alpha=.839\sim.706$ ）。続いて、下位尺度ごとの因子得点に基づいてクラスター分析を実施、全体をレジャー志向性に関して様々な特徴をもついくつかのグループに分類した後、グループ間でレジャー参加度、レジャー満足度、内発的動機づけ、好みの旅行スタイル、旅行に求める要素、旅行経験、全般的well-being指標等を比較していった。レジャー生活の充実度、生活全体の充実度、旅行等、どの生活局面に関する比較結果にも、最も積極的・活動的な行動傾向を示す「最適型」から→「高活動－対人関係志向型」→「自己啓発型」「低活動－対人関係依存型」→最後に最も消極的・非活動的な姿勢が特徴の「消極型」という順序で、得点・水準が低下していくパターンが認められた。一連の統計分析の結果は、レジャー志向性の考え方が個人のレジャー生活や、ひいては生活全般の充実の程度を予測するのに有効であることを示しており、これを定量化する志向性尺度は、レジャー教育や支援等の実践場面において、効果的に個人のレジャー生活の現状を評価するツールとしての可能性をもつことが示された。

キーワード：アセスメントツールの開発、レジャー志向性尺度、尺度の安定性と実際の有効性、旅行行動予測

## 問 題

人口構成の多くを占める団塊世代が一時に定年退職を迎えるなど、このところ高齢化の進行が加速化している。加えて、年金、医療制度、福祉等の社会保障基盤もあちこちで綻びが目立つと言われる。このような情勢の中、退職後、あるいは子ども世代の独立後の人生・生活の質をいかに豊か

に保っていくかという問いは、個人レベルでも、また社会的な視点から見ても非常に重要な検討課題となりつつある。

仕事や子どもの養育等の役割義務から開放された人々にとって、人生や生活の質を大きく左右する重要事項とは、自由時間（役割義務に縛られない自由裁量時間）をどのように活用し、どのような活動をどれくらい活発・積極的に行い、そして、

それらの活動をどれくらい楽しんで、満足のいくものになっているかということにつけるであろう。

一方、社会からの、あるいは施策提言という目線で考えると、個人のレジャー生活の充実を支援していくための第一歩は、現時点での各個人のレジャー生活の実情、およびレジャーに対する態度や動機づけなどを総合的に診断・評価することであり、その後、その個人をより良い方向へと導くべく、情報や助言、具体的支援策の提供がなされるというのが、効果的なプロセスといえるのではないだろうか。

当研究者はこのような問題意識から、成人、とりわけ中高齢者のレジャー生活の状況把握とそれが well-being に及ぼす影響の研究を、比較的中長期のタイムスパンで進める必要性を認識し、これまで、個人のレジャー生活の実態ならびにレジャーに対する考え方を把握するための鍵となるような中核概念を探索し、定量化することに取り組んできた。

研究を進めるに際して、レジャー研究の先進の地、北米でのレジャー生活のアセスメントを目指した概念の検討と診断ツール開発に関する研究動向をレビューしたところ、個人のレジャー生活の充実度を把握するアセスメント作業に用いることができるツールの開発を試みた研究は相当数見受けられた。例えば、LDB (Leisure Diagnostic Battery) (Witt & Ellis, 1989, 1985, 1984; Ellis & Witt, 1994, 1984) などは最も包括的で大掛かりな診断ツールとして知られている。また、レジャー活動の量的な活発さを測る指標・方法としては、レジャー行動目録—LBI (Leisure Behavior Inventories)—という形式が最も一般的である。さらに、動機づけ傾向 (Graef, Csikszentmihalyi & Gianinno, 1983; Weissinger & Bandalos, 1995) や退屈状況に対する感応性と耐性 (Iso-Ahola & Weissinger, 1990; Weissinger, Caldwell, & Bandalos, 1992), 阻害 (コンストレイント) 要因に対する認知の特徴 (Crawford, Jackson, &

Godbey, 1991; Jackson, 1993, 1988; Jackson, Crawford, & Godbey, 1992), コンストレイント調整力 (Hubbard & Mannell, 2001; Son, Mowen, & Kerstetter, 2008), ストレス対処スタイル (Iwasaki & Mannell, 2000) 等の態度・動機づけ・行動特性なども個人のレジャー生活の充実度を測る観点として検討されてきた。

しかし、これら様々な尺度開発研究をレビューした結果、数的には非常に多くの尺度研究が存在するものの、簡便かつレジャーの充実度を有効に弁別しうるような効力のある観点・尺度を提示する評価の定まった研究をあげることは困難なことがわかった。また、単なる外国研究の移植というのではなく、自国の現状に即しており、程よく簡便で実践場面での使い勝手もよい、そしてなおかつ、的確に状況査定を行えるレジャー生活アセスメントツールを開発する必要があることも実感した。

そこで、2006年には、「レジャー志向性尺度の開発に関する研究」(佐橋・多留, 2006)と題して、レジャー生活の診断・評価にあたり、志向性という概念に着目し、この志向性からどれだけレジャー生活全般に関する有益な情報を引き出せるかを、試験的にレジャー志向性尺度を作成、女子大学生に実施して検討した。そこでは、レジャーにおける志向性は、「長期的展望一向上」「活動性」「主導性」「自然志向」「対人関係志向」の5側面から把握することができ、これらの下位概念のうち、とりわけ「主導性」や「長期的展望一向上」「活動性」の得点が、様々なレジャー領域への参加度から見たレジャースタイルや、内発的動機づけレベル、退屈感や阻害レベルの低さなどと密接な関係があることが明らかになり、志向性がレジャー参加の量・質両面での有益な情報をもたらすことが実証された。しかし、この研究における知見は、あくまで少人数の女子大学生に限られたものであり、次の段階では、より大規模なサンプルにおいて再度検討すべき必要があった。また、志向性の

把握にあたっても、より有効な下位概念があるかもしれない、追加の調査と分析が必要と考えられた。

2007～08年には、その検討事項を踏まえて、新たな視点を取り込んで拡充した6側面からなる志向性尺度を再構成し、より大人数の女子大学生サンプルに対して実施して、診断ツールとしての有効性についての検討を行った（佐橋，2008）。そこでは、なおも大学生サンプルということに変わりではなく、検討結果の敷衍については限界があるものの、① レジャー志向性の概念がほぼ安定した下位概念から構成されること、② この志向性概念がレジャー生活の量的あるいは質的な意味での充実度をかなり正確に予測でき、さらに③ 生活全般の充実度（well-being）さえも予測できる非常に有効な概念であることを明らかにすることができたと思われる。

以上の研究結果を基礎としつつ本研究では、これまで準備段階のため、大学生サンプルという限定的な対象に対してしか検証作業を行っていなかったところを、20歳以上の幅広い年齢層の一般成人女性にまで対象の範囲を広げ、これまでと同様の分析手続きを用いて尺度の安定性や実効の有効性を検討し、尺度開発に資する基礎データを蓄積していくことをねらいとする。

さらに、尺度研究のより発展的な展開のために、開発した志向性尺度を新たな対象領域、すなわち、レジャー活動の重要な一翼を担っている「旅行」行動の特徴把握や行動予測に応用して、新たな知見を探っていきたい。

## 方 法

### 調査対象

奈良県下O女子大学生と同大学卒業生の家族・知人、および、調査者が関係するスポーツ・フィットネスサークル、趣味サークルの会員およびその知人等で構成される20歳以上の成人女性。

### 調査手続き

すべての対象者に同一の質問紙（『余暇生活・旅行ニーズに関する調査』）を使用した。質問紙のおよそ4分の1はO女子大学生に授業時間の中で実施し、さらに4分の1についてはO女子大学卒業生を介して配布回収し、残り約半数については当研究者が、各フィットネス・趣味サークル活動時に活動場所に出向き、調査を実施するという手続きで進めた。すべての調査は2007年の7月～2008年8月の間に行われた。

### 有効回答

以下の質問内容のうち、特に、中心となる志向性尺度において不完全な回答を除外し、228件を分析の対象とした。系統的抽出によらない任意調査であることから、簡略して年齢構成のみ示すと、20歳代26.8%（61）、30歳代18.9%（43）、40歳代18.0%（41）、50歳代21.1%（48）、60歳以上15.4%（35）であった。

### 質問紙の構成

大きくは、レジャーに対する考え方や好みなどの意識傾向とレジャー生活の実態像を捉えるための質問、レジャーの重要な一翼を担う活動である旅行に関する質問、そして生活全般にわたる満足感などwell-beingを尋ねる質問から成っていた。

**レジャー志向性尺度** 32項目からなり、各設問ともレジャー場面における考え方、行動傾向を表す内容的に相反する2つの文章「A○○……」「B○○……」が示され、これらについて、自分の考えや行動に相当する程度を「A」「どちらかといえばA」「どちらかといえばB」「B」のいずれかで回答する。

**レジャー生活の実態把握** 様々なレジャー活動種目（47活動）における参加の実態（量的側面）を、実施頻度を答えてもらうことにより、参加度得点として数量化した。また、レジャー参加の質的な側面に関しては、Weissinger & Bandalos（1995）のレジャー内発的動機づけ尺度や、Witt & Ellis（1989）の阻害要因認知測定尺度、単一のレジャー生活満足度尺度などによってその実態を

把握することとした。

**旅行に関する質問** レジャー活動の典型的な一領域である旅行に関する質問については、① 好みの旅行スタイル（「家族旅行」「リゾート」「都市型遊興」などの16項目にわたる旅行タイプから第1位と第2位を回答）、② 旅行する際に重視する条件（「人間関係を深める」「のんびりリラックスする」「見聞を広め知識を豊かにする」など17項目にわたる重視項目に対し、「非常に重視する」～「重視しない」の5段階で評定）、③ 過去の旅行経験（これまでの海外旅行の回数と昨年の国内旅行回数）等についてデータを収集した。

**生活全般にわたる well-being を測定する項目** レジャー生活の充実度が全般的 well-being 向上にどの程度貢献しているのか検討することを目的として、従属変数である well-being を把握するために、① 生きがい度テスト（Purpose in Life Test, Part-A）、② 充実感尺度（大野，1984）、③ 自作の QOL 尺度（友人関係、家族関係、仕事、時間的ゆとり、経済的ゆとり等、日常を構成する様々な生活局面について満足度を尋ね、それらを総合して分析に使用）を実施した。

## 結果と考察

### 1. レジャー志向性尺度の構造・安定性の検討

佐橋（2008）は、レジャー志向性の概念をレジャー行動予測における重要な鍵概念と考え、測定尺度を試験的に作成し、尺度の構造や信頼性などいくつかの統計指標について検討・報告しているが、本報告においても、尺度の安定性や、広く日常のレジャー場面全般に対する尺度の解析力についてまずは検討する。その上で、この志向性尺度によってどの程度、レジャー活動の一環として位置づけられる個人の旅行行動の特徴を描き出すことが可能なのか検討していくこととしたい。

先の研究と同様に、志向性尺度32項目に対し、主因子法による因子分析を行った。まずはじめに、

固有値1.0以上という基準で因子抽出を行ったところ、9因子が抽出されたが、その後については、前分析（佐橋，2008）で明らかになった6つの構成要素（因子）との対応を念頭に置きつつ、意味的・内容的整合性が最大限得られる因子数へと絞っていく作業を繰り返した（解釈はプロマックス斜交回転後の結果に基づく）。最終的に採用した因子分析の結果ならびに基本的な統計量を表1に示した。

佐橋（2008）の分析では、志向性を構成する要素として、Ⅰ. 長期的展望・向上、Ⅱ. 活動性、Ⅲ. 対人関係志向、Ⅳ. 主導性、Ⅴ. 利他主義、Ⅵ. 自然志向の6要素がこの順序で抽出されたが、今回の分析においても、抽出の順序が若干異なっているものの、内容的にはほぼ同一の6要素が確認された。抽出順序が異なっていたところは、Ⅲ. 対人関係志向とⅣ. 主導性であった（表1）。

因みに、因子分析を繰り返して、最適な因子数へと絞り込んでいく作業の中で明らかになったことは、どの因子数指定の計算結果においても、「長期的展望・向上」「主導性」「利他主義」「自然志向」の4因子への高負荷項目は安定して纏って見られるが、「活動性」と「対人関係志向」因子に属すると想定された項目は、9～7の因子抽出の過程において、安定的な上述4因子を除いた残りの因子の中で浮動することであった。

第Ⅰ因子には、短期的、今ここでの（即時的・刹那的）楽しさを追求するというよりは、長期的な視点を持ち、自身の将来を見すえて、後の人生を豊かにするような行動を選択する傾向、知識やスキルを必要としない手軽な活動よりも、多少複雑で手応えがある挑戦的な活動を好み、面倒くささらず根気よく取り組んでいく傾向（いわゆる“向上心”が強い）を捉える項目の負荷が高く、「長期的展望・向上」と名づけた。なお、No. 22の「新しく何かを学ぶことが好き—学ばなくてはならないような趣味活動はしない」は、当該因子の他に第Ⅱ因子への負荷も高いのであるが、先の

表1 レジャー志向性尺度の基本統計量および因子分析の結果

NO	質問内容(一)	質問内容(十)	平均	SD	第I因子 長期向上 展望	第II因子 活動性	第III因子 主導性	第IV因子 対人関係 志向	第V因子 利他主義	第VI因子 自然志向	クロンバ ック $\alpha$
* 13	B 今を楽しみたい	A 将来の目標に向かって自分を向上させることをしたい	2.29	1.00	.7861	-.122	-.060	.008	-.029	-.081	
* 21	B 面倒なことは避けて楽しめる活動をする	A 知識や技能がなくても努力すればできるようになると思う	2.31	0.83	.7381	-.142	.048	.142	.122	-.053	
* 28	A 今楽しいことをするのが私のポリシーだ	B 将来の自分にとって適になる活動を趣味として行う	2.31	0.78	.7281	-.142	-.025	.107	.033	.016	
* 30	B 趣味なのだから楽しんでいいたい	A 趣味があっても飽きるためにいかなる努力も惜しまない	2.22	0.89	.6251	.177	.083	-.076	-.126	-.054	.839
* 14	B 自分のやり方で楽しめばいい	A 資格取得や技能向上を意欲しながら趣味活動をする	2.13	0.92	.5941	-.006	.097	.062	.076	.082	
* 5	A 暇な時は遊びたい	B 時間ができれば何か学びたい	2.27	0.99	.4881	.138	-.145	-.211	-.013	.005	
22	A 学ばなくてはならないような趣味活動はしない	B 新しく何かを学ぶことが好き	2.62	0.84	.4431	.402	-.147	-.020	-.046	.251	
6	A 手軽で誰でも楽しめる活動が好き	B 挑戦的で奥深い活動が好き	2.00	0.89	.4411	.136	.129	-.272	-.006	-.116	
* 25	B 休養する方がエネルギーになる	A 体を動かす方がエネルギー充電になる	2.32	0.93	-.0211	.7281	-.059	-.033	.002	-.020	
* 1	B ゴロゴロしたい	A 体を動かしたい	2.56	0.89	.1071	.6891	-.019	.196	-.060	-.042	
* 18	B 家で雑誌やインターネットの観光情報を見てるのが楽しい	A ドライブや旅行に積極的に出かける	2.84	0.84	-.1181	.5651	.180	.154	-.044	-.083	
* 17	B 休養・リラックスを優先させる	A スポーツやフットボールなどをして体を動かす	2.16	0.88	.1201	.5281	.022	.092	.083	-.008	.776
2	A 家にいたい	B 出かけたい	2.66	0.88	-.0881	.4961	-.074	.213	-.083	.034	
* 10	B 出かけるよりはテレビやビデオを見る	A 映画やコンサートを見に行く	2.58	0.94	-.1201	.4251	.131	.128	.082	-.152	
9	A テレビを見たり音楽を聴いたり静かにすごす	B 作業や手仕事をしてこまめに動く	2.39	0.94	.1531	.3471	.089	-.052	.032	.015	
* 26	B 外に出なくても身近で楽しめることはたくさんある	A 外出好きで面白く外に出て探している	2.32	0.78	.0341	.1951	.112	.344	.012	-.181	
* 23	B 提案された計画に乗るというのがいつものパターンだ	A 最初に何かの提案をするのは自分だ	2.29	0.95	-.0371	.0101	.8041	.008	-.014	.069	
31	A 何かを計画する時大体自分自身はサポート役だ	B 何かを計画する時自分が中心となって進める方だ	2.27	0.82	.0191	-.0261	.7911	-.050	.007	-.012	.769
* 15	B 人から誘われるのを待っている方が好きだ	A 自分が中心となって計画を立てるのは楽しい	2.47	0.90	-.0051	.1141	.7291	-.092	-.021	.126	
* 7	B あまり自立せず控え目	A 人が集まる場面では輪の中心	2.17	0.79	.1021	-.0901	.3541	.235	.087	-.066	
* 12	B 一人で趣味に没頭	A 誰かと一緒に過ごす	2.64	0.90	-.0351	.0231	-.0141	.7621	.092	.088	
20	A 一人で音楽を聴いたり本を読んだりする	B 友達や家族とおしゃべりする	2.58	0.93	.1461	.1201	.0451	.6121	-.260	.006	.706
4	A 一人で過ごしたい	B 友達と過ごしたい	2.76	0.92	-.0491	.2451	-.1051	.5981	.067	.066	
* 28	B 私の趣味活動は一人ですものが多い	A 私の趣味活動は人と一緒にするものが多い	2.54	0.89	-.1371	.3371	-.0541	.3571	.069	-.009	
* 24	B 自由時間は自分のために使いたい	A 自由時間には、できるかぎり社会や人の役に立ちたい	2.12	0.83	.1391	-.1381	-.0171	.1271	.8031	.047	
* 8	B 自由時間は自分の楽しみや将来のために使いたい	A 人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う	2.05	0.80	-.0651	-.0561	.0171	.0211	.7281	-.112	.760
16	A ボランティア活動やボランティアなどにはまず関わらない	B ボランティアやNPOの活動など、時間があつたらしてみたい	2.49	0.95	-.0661	.3091	.0051	-.1761	.5191	.141	
32	A まずは、自分のことが優先されると思う	B 積極的にボランティアや社会貢献活動に関わっていきたい	2.14	0.67	.0691	.1721	.0041	-.1151	.4901	-.042	
* 27	B 繁華街など人の多いところに行きたい	A 人のいない静かな場所に行きたい	2.96	0.77	.0901	-.0201	.0891	.0871	-.0471	.7471	
* 3	B 旅行するなら人があふれる雑多なところ	A 旅行するなら自然豊かなところ	3.39	0.79	-.0481	-.0201	.0001	.0471	.0411	.6841	.764
* 11	B 人の中に入ると落ち着く	A 自然の中に入ると落ち着く	3.43	0.66	-.1481	.0061	.0601	-.0321	-.0791	.6751	
19	A 環境問題や食の安全などには興味がない	B 自然の中でのスローライフにあこがれる	2.87	0.81	.0361	.2081	.0081	.0141	.0631	.3491	
因子相関行列											
説明率 54.2%											
I I 417 .187 .416 .110 .845											
II — — .384 .142 .431 .090											
III — — — .136 .202 .103											
IV — — — — .106 .133											
V — — — — — —											
VI — — — — — —											

※得点化は、通常の場合 A→B の順に 1~4 点を配点。項目番号に \* が付されている場合は A→B の順に 4~1 点を与えた。

分析結果（佐橋，2008；Sahashi & Sato，2007）ではこのような現象は認められなかったため，偶発的要因と考えた。

第Ⅱ因子には，No. 25「体を動かす方がエネルギー充電になる－休養する方がエネルギー充電になる」，No. 1「体を動かしたい－ゴロゴロしたい」，No. 18「ドライブや旅行に積極的に出かける－家で雑誌やインターネットの観光情報を見ているのが楽しい」，No. 2「出かけたい－家にいたい」等の項目の負荷が高く，休養よりは体を活発に動かそうとする“身体面の活発さ”と，室内での二次的・バーチャルな体験よりは，外での直接体験，本物体験を求める“心理面での活動性（外出志向）”を表す要素と解釈した。身体面と心理面の活発さが合わさった幅広い意味での活発さと見なして「活動性」と命名した。ここには，一般に言われている，因子構成項目として採択する際の基準－負荷量 0.35～0.40－に達しない項目が 2 つ存在したが，No. 9 の .347 については，充分許容できる範囲と考えた。一方，No. 26「外出好きで面白いことを外に出て探している－外に出なくても身近で楽しめることはたくさんある」については，第Ⅳ因子への負荷の方が .344 と想定因子への負荷量 .195 よりも高く，先の結果（佐橋，2008）とは異なっていた。そこでは，No. 26 は「活動性」因子に 4 番目に強く関連しており，偶発的ともいえないが，一方，本調査対象の場合，外出の際には人と一緒にすることが多いのか，「対人関係志向」の要素をより大きく評価するという結果となっていた。No. 26 については，今後の検討点と認識しつつ，今回は前研究との整合性の方をとって，この因子の所属項目と見なしていく。

第Ⅲ因子には，レジャー場面において自ら率先して計画・企画し，他者をもリードするような積極性を表す 4 項目が纏まり，「主導性」とした。

第Ⅳ因子－「対人関係志向」－は，レジャー場面において他者との経験の共有を志向するのか，

単独での行動，あるいは一人で集中して行う活動が好きなのかを尋ねる 4 項目の負荷が高かった。

第Ⅴ因子にはレジャー享受面で，もっぱら自分自身の興味・欲求を優先しようとするのか，他者や社会への関心をもちながら，人のためになる利他的活動の中に自身の喜びを見出そうとするのか，どちらの方向性が強いのかを測る項目が集まり，「利他主義」と命名した。

第Ⅵ因子は，日常の慌しさ，人ごみから逃れて，静かで心休まる場所，自然豊かな環境を求める傾向を表していた。4 項目中，No. 19 の因子負荷量が .349 と基準をわずかに下回っていたものの，充分許容できる範囲であった。

以上の因子分析結果は，2008 年の分析結果とはほぼ一致するものであり，学生サンプルから，一般成人女性サンプルへと調査対象の範囲を広げた場合でも，志向性尺度の 6 因子構造は変わらず，尺度の安定性を確認できたのではないかと考える。

下位尺度ごとの信頼性係数は， $\alpha = .839 \sim .706$  であり，各下位尺度の内的一貫性は十分に高いと言えた。

## 2. 志向性尺度の有効性の検討－志向性に基づくサンプル分類とグループ間特性比較から

ここでは，志向性尺度を用いてサンプル全体をいくつかのグループにセグメンテーションし，そのグループ間でレジャー行動やレジャー生活全般の満足度などを比較する。グループ間でレジャー行動やレジャー生活の質的充実の差異に関して，いくらかでも意味あるパターンを読み取ることができれば，志向性尺度がレジャー生活の充実度を読み取るツールとして効力をもつと考えた。

まず，セグメンテーションにあたっては，表 1 の因子分析の結果算出された因子得点を用いて，階層クラスター分析（Ward 法）を試みた。グループ構成人数や志向性についての特徴の解釈という点を重視して，5 グループへの分割を最適解として採用した（4 分割の場合，5 グループ分割の際

の2グループが統合されるだけで、その他のグループ間での組み替えは起こらなかった)。図1は、全サンプルを5グループに分けた場合の、各グループの志向性に関するプロフィール(平均得点)を示したものである。

グループ間で、レジャー生活に関してどのような差異があるのかを検討していく前に、各グループのレジャー志向性特性を端的に表しており、直感的な理解の助けとなるような“ラベル”が必要になると考えた。そこで、志向性プロフィール(図1)の形状に見られる特徴を手がかりとしながら、グループ名を考案していった。

図1のcluster 5を見ると、「対人関係志向」以外のすべての志向性要素において最高得点を示している。このグループには、レジャー場面における行動傾向や考え方が最も理想型に近いサンプルが集まったと考え、「最適型」と呼ぶことにした。

これに続いて、6因子中3因子でcluster 5に次ぐ2番目に高い値を示したのがcluster 3である。このグループの目立った特徴としては、「対人関係志向」の得点が際立って高く、レジャー場面において他者との関係を重視し、グループでの、あるいは人と一緒にする活動を好むというところ

であり、他方、落ちつける静かな環境を求める気持ち치가5グループ中最も希薄なところである。これらの特徴を踏まえて、「高活動-対人関係志向型」と呼ぶことにした。

cluster 2は、ほとんどの要素の得点が平均(=0)レベルのグループであるが、そこにあって、「長期的展望・向上」因子の得点が相対的に高い(第2位)ところが特徴といえる。すなわち、手軽で刹那的な楽しみを求めるよりは、将来、役に立ちそうな活動や自分を向上させてくれる自己啓発的な活動を進んで行おうとする。また、自身の成長、自己啓発に関心が注がれる内省的な性格のためか、人づきあい・対人関係に対する関心が薄いという傾向も読み取れる。従ってこれは、2008年の研究において確認された「自己啓発型」に相当するグループと考えられた。

cluster 4は、cluster 3-「高活動-対人関係志向型」と対比させてみると捉えやすい。cluster 3は、活動的で、主導性(積極性)もあり、他者や社会に対する関心も高い方である。その上で、一人よりは人と一緒にいることを好む性格といえるが、cluster 4の方は、積極性・活動性に欠けるために(「活動性」「主導性」は2番目に低得点)、

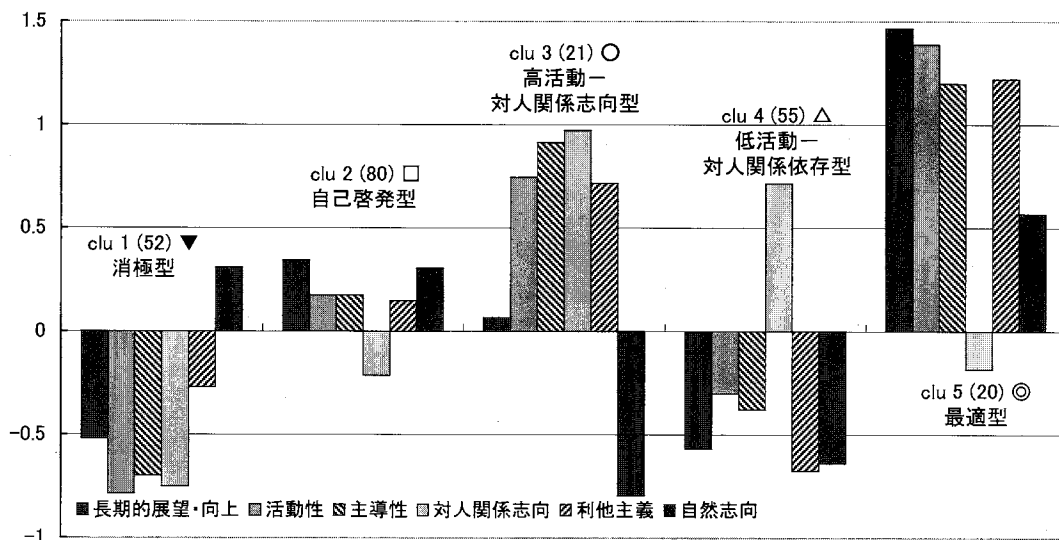


図1 各クラスターにおけるレジャー志向性の得点パターン(プロフィール)

単独での自立した行動がとれないというマイナス面が目についた。cluster 3 との対照的な点を前面に建てて「低活動－対人関係依存型」と名づけることにした。

最後は cluster 1 である。このグループは、cluster 5－「最適型」－と真逆のプロフィールを示している。「活動性」「主導性」「対人関係志向」の3要素で最低レベル、「長期的展望・向上」「利他主義」のレベルも2番目に低い。理想型としてポジティブエンドに位置しているのが「最適型」とするならば、cluster 1 は最も未成熟・未発達なネガティブエンドにあると言え、「消極型」と呼ぶことにした。

以上のグルーピング作業に続き、それぞれが固有のプロフィールをもつ5つのグループ間でレジャー活動参加の様々な側面に関して差が認められるかどうか、分散分析・多重比較等の分析により検討

した。そして、レジャー生活の様々な側面に関する比較結果を通覧する中で、志向性尺度上の特性がレジャー生活の充実に影響していくそのありように通底するパターンを探った。

図2は、様々なレジャー活動領域（11領域）の実施頻度、ならびに各領域の実施得点を加算・平均化した全般的レジャー活動参加度など、レジャー活動参加の量的側面について比較した結果の中から、特徴的な項目を図に示したものである。回答は47の活動種目に対して、それぞれ実施頻度を「非常によくする(5)」「よくする(4)」「ときどきする(3)」「まれにする(2)」「しない(1)」の5段階で評定する方式になっており、その結果は、因子分析などの縮約作業を経て、11の活動中分類（付表1）へと纏められ、この11分類に基づいて計算した平均値を分散分析に投入していった。

11の活動領域と全般的な参加度に対する分散

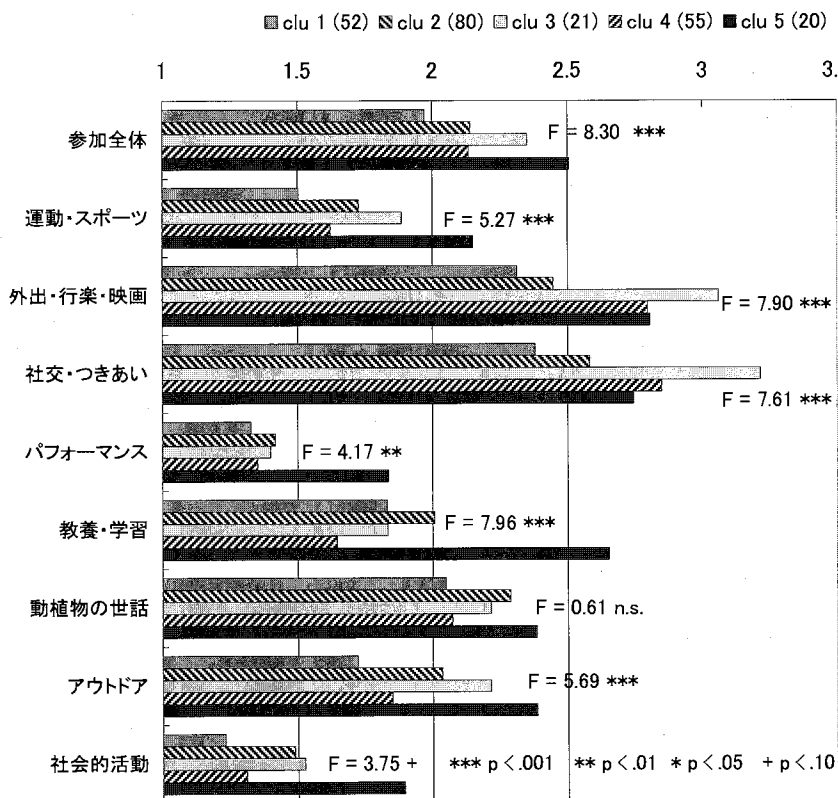


図2 レジャー参加の量的側面（頻度）に対する志向性の影響



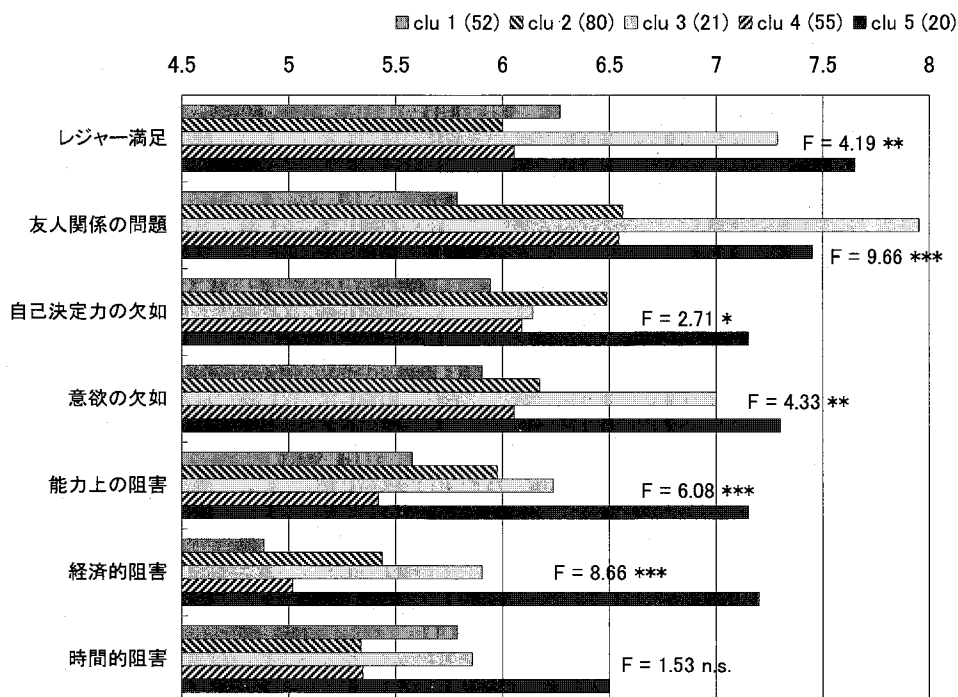


図3 レジャー参加の質的側面（満足度・障害認知）に対する志向性の影響

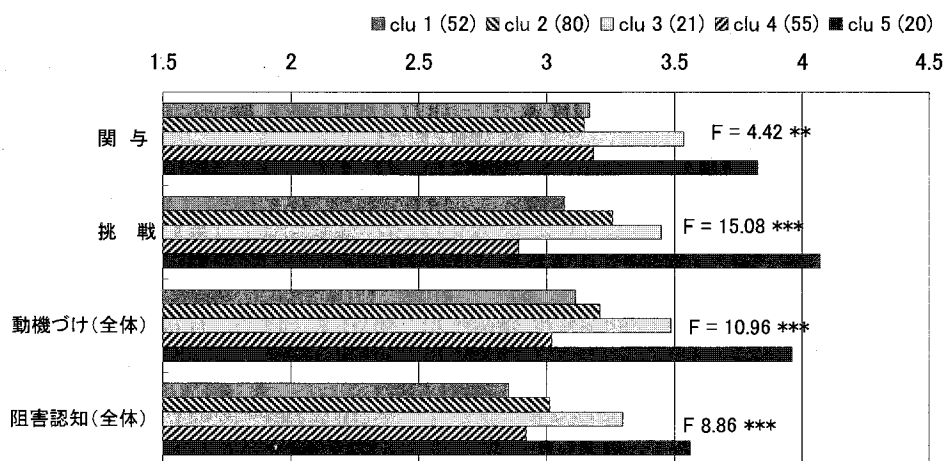


図4 レジャー参加の質的側面（内発的動機づけ等）に対する志向性の影響

分析の結果、統計的に有意な差が認められたのは7つの活動領域と全般的参加度であった。グループごとの活動参加の概況を把握するには、様々な領域の活動量を総合的に捉える「参加度全体」によるのがよいであろう。これに関しては0.1%水準以上で、グループ間に活動量の差異があること

が判明し、さらに多重比較の結果、cluster 2 と cluster 4, cluster 3 と cluster 5 の間には有意なレベル差はないものの、それ以外の組み合わせでは、5%水準で有意差が確認されている。すなわち、clu 5→clu 3→clu 2・clu 4→clu 1 という順番で、レジャー活動参加が活発であるということ

が示された。活動量の面で顕著な差異が認められなかったのは、他者との関係よりも自身の問題に関心が向かいがちな「自己啓発型」(clu 2)と、活動性や主導性が低く対人関係に過度に依存する「低活動－対人関係依存型」(clu 4)の2グループであった。

領域ごとの分析結果で特徴的なパターンを示していたのは、「運動・スポーツ」「社交・つきあい」「教養・学習」などの領域であった。「運動・スポーツ」では、やはり鍵を握るのは志向性の中の「活動性」の要素であろう。多重比較の結果、clu 1とclu 4、clu 2・3とclu 4、clu 3とclu 5の間には有意差は確認できないものの、ほぼ志向性の「活動性」要素の得点順 (clu 5>clu 3>clu 2>clu 4>clu 1)に「運動・スポーツ」活動の頻度も高くなっていた。「社交・つきあい」では、「対人関係志向」の得点順 (clu 3>clu 4>clu 5・2>clu 1)と頻度の順はほぼ対応する形であった。「教養・学習」の領域に関しても、鍵を握るであろう「長期的展望・向上」因子の得点パターンと頻度の得点パターンの形状はほぼ一致していた。

一方、図3はレジャー生活に対する満足度やレジャー参加を妨げる阻害要因の認知度など、レジャーの質的な側面に関しての検討結果を示している。阻害要因の認知度については「コミュニケーションスキルの問題」「友人関係の問題」「環境・機会に関する問題」等、レジャー活動場面において直面するであろう8側面にわたる阻害について、「非常にあてはまる(1)」～「まったくあてはまらない(5)」の5件法でその重大さの程度についての回答を求めているが(各領域2項目)、図3には6領域の結果を示した。

さらに図4は、レジャー活動に対する動機づけの強さや、8領域の参加阻害を合成して単一指標に変換した全体的参加阻害度を比較したものである。動機づけに関しては、Weissinger & Bandalos (1995)によるレジャー内発的動機づけ尺度 (Intrinsic Leisure Motivation Scale) を

部分的に使用した。本来の尺度は、「自己決定」「コンピテンス」「関与」「挑戦」の4次元、24項目から成っているが、本調査ではそのうち、「関与」の4項目と「挑戦」の5項目を選んで使用した。

量的な側面と同様に、質的な面についてもclu 5→clu 3→clu 2・clu 4→clu 1の順序関係はほぼ変わることがなかった。

このように、レジャー生活の量・質両面での充実とは志向性上の特徴と共変関係にある、すなわち志向性に影響されることが明らかになった。しかも、その影響パターンには規則性があり、最適型 (clu 5)→高活動－対人関係志向型 (clu 3)→自己啓発型 (clu 2)・低活動－対人関係依存型 (clu 4)→消極型 (clu 1)という明確な順序性が量的・質的充実を測る様々な指標において随所に確認された。

### 3. 旅行行動予測への応用

この項では、志向性のプロフィールを個人の実際の旅行行動や個人が求めている旅行像を描き出すためのツールとして活用できるかどうか検討していく。旅行といういわば典型的レジャーの文脈においても、原則、レジャー志向性という枠組みを適用してやることによって、個人の旅行行動や旅行意識の特徴が明瞭に描き出されるのならば、志向性尺度の実際的な有効性がさらに確実なものとなると考えた。

まず、対象者が好む旅行スタイルと志向性の関係について見ていく。好みの旅行スタイルについては、16あげた様々な旅行スタイル(例えば、「家族旅行」「リゾート」「都市型遊興」など)の中から、最も好む旅行スタイルを2つ答えてもらうことで把握した。志向性によって分けられた5グループ間で、旅行スタイル選択に何らかの偏りが認められれば、それは志向性尺度の有効性が高いということになる。表2のクロス集計の結果を見ると、旅行スタイルの種類・項目数が多い

ため、明確な傾向性を確認するには至らなかったが、いくつか印象に残った特徴・傾向性について指摘しておきたい。特に、「癒し志向」の旅行については、clu 1の「消極型」とclu 2の「自己啓発型」の選択率が高く、「アウトドア」ではclu 5の「最適型」とclu 3の「高活動－対人関係志向型」の選択率が相対的に高かった。また、「リゾート」滞在型の旅行をclu 5－「最適型」はあまり好まないという特徴が読み取れた。このような選択傾向は、各グループの志向性の特徴を幾

分反映したものであった。

次に、旅行の際にどのような要素を重視するのか、旅行意識と志向性の関わりについて検討した。旅行する場合にどのような要素を重視するのかは、予め選定した17の事項それぞれについて、どの程度重視するのかを5段階のリッカート形式で尋ねている。そして、この17の重視項目に対して因子分析を実施し、「鮮烈体験」「視野拡大」「人間関係」「快適生活」「リラックス・癒し」の5つの要素に縮約し、下位尺度の得点を比較していっ

表2 好みの旅行スタイル（第1位，2位）に対する志向性の影響（％）

旅行のタイプ	clu 1 (52)	clu 2 (80)	clu 3 (21)	clu 4 (55)	clu 5 (20)	合計
	消極	自己啓発	高活動－対人志向	低活動－対人依存	最適	
1 計画的冒険者	5.8	11.3	14.3	8.2	10.0	9.4
2 気軽な旅行者	8.7	11.3	16.7	15.5	10.0	12.1
3 低リスク旅行者	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9
4 在宅旅行者	3.8	1.9	0.0	4.5	0.0	2.6
5 家族旅行者	16.3	13.1	21.4	18.2	17.5	16.2
6 交流志向	0.0	1.3	0.0	1.8	12.5	2.0
7 癒し志向	26.9	21.9	14.3	13.6	10.0	19.3
8 経験志向	4.8	3.1	2.4	1.8	10.0	3.7
9 活動的参加	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	0.7
10 アウトドア	4.8	5.6	9.5	1.8	10.0	5.3
11 リゾート	10.6	8.1	9.5	13.6	5.0	9.9
12 民宿／B&B	2.9	3.8	2.4	3.6	0.0	3.1
13 都市文化	1.9	7.5	2.4	4.5	0.0	4.4
14 遺産	3.8	6.3	0.0	4.5	15.0	5.5
15 都市型遊興	2.9	0.6	7.1	8.2	0.0	3.5
16 自己探求	2.9	2.5	0.0	0.0	0.0	1.5
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2=117.82 \quad df=60 \quad p<.000$$

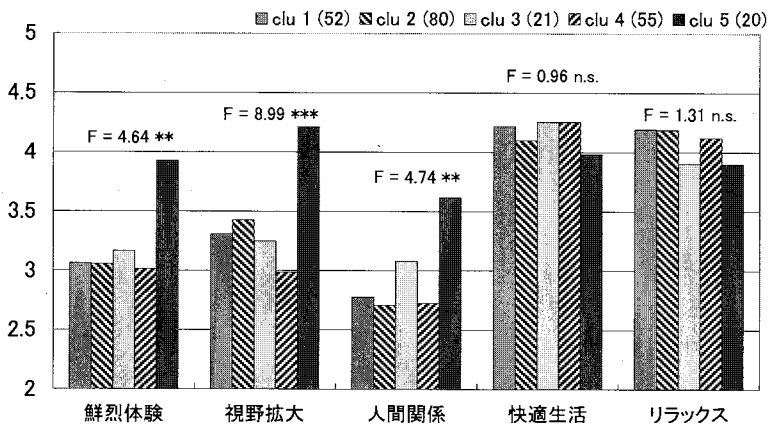


図5 志向性が旅行意識（旅行の際に重視することがら）に及ぼす影響

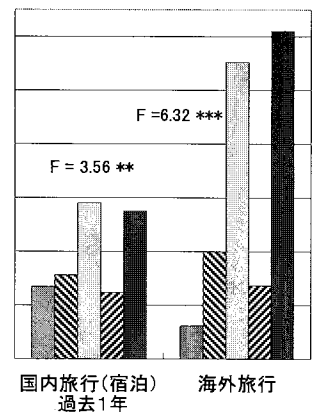


図6 旅行回数の比較

た。具体的な質問内容および因子分析の結果は資料（付表2）に示した。

図5は、意識の面で、各志向性グループ間でのような違いがあるのかを検討した結果である。5つの要素のうち、重視得点に有意差が認められたのは、「鮮烈体験」「視野拡大」「人間関係」の3要素であり、「快適生活」と「リラックス・癒し」には有意差は認められなかった。有意な結果が出たどの要素においても、clu 5-「最適型」の得点が際立って高く、その他のグループ間では有意差が見られないという結果であった。これに対して、統計的な有意差は確認できなかったものの、「最適型」の「快適生活」や「リラックス」できる環境に対する重視度が最も低いところが注目点であった。

実際の旅行行動の量的側面については、海外旅行の回数や、昨年度の国内旅行回数に関して分析を行った。結果は図6である。過去1年の宿泊を伴う国内旅行の回数は、1%水準でグループの平均値に有意差が認められており、clu 3とclu 5の旅行回数が、他の3グループを大きく上回るという結果であった。clu 3とclu 5の間の差異は有意ではないものの、僅かではあるがclu 3の回数がclu 5を上回って最多であった。海外旅行に関しても、clu 3とclu 5が、他の3グループよりも格段に経験豊富であった。

以上、レジャー志向性が個人の旅行に対する好みや旅行に期待するもの、旅行経験などにどのように影響しているのかを見てきたが、旅行行動のどの側面についても、志向性の特徴がかなりの程度、反映される結果であった。

#### 4. レジャーの充実と生活全般の満足感・well-being

これまでの分析では、レジャーに対する好みや行動の傾向性である“志向性”が、レジャー生活の様々な局面において、その方向性をナビゲートする様子が浮き彫りになった。分析の次なるステッ

プでは、レジャー活動を媒介として、個人の日常生活全般の質や心理的 well-being がどのようにして良好な状態へと改善されていくのかについて検討してみたい。

個人は「消極型」から「最適型」に至る発展プロセスに沿って、いくつかのステップを登っていく。それぞれの個人（あるいは、志向性グループ）は、独自のレジャーに対する好みや傾向性を具現化するべく、それぞれのレジャー活動を展開していく。その結果として、生活全般の質や心理的 well-being に何らかの変化が生じてくる。レジャー志向性がレジャー行動へ、そしてさらには生活全般の質向上へと影響を及ぼすプロセスはおそらくそのように表現されるのであろう。

図7には心理的 well-being レベルを測る指標として定評のある生きがい度（Purpose in Life）テストや充実感尺度（大野，1984），QOL 尺度に関する分析結果を示した。これまでの分析で浮かび上がった影響のパターンが、生活全般の質や well-being など、より広範・抽象的な領域においても同様に作用していることが示された。どの指標を取り上げるにしても、「最適型」が最もポジティブな最高の位置にあり、若干下がったところに「高活動-対人関係志向型」が位置し、次に「自己啓発型」「低活動-対人関係依存型」を挟んで、最終的にネガティブエンドの「消極型」へと至る下降ラインを想い描くことができる。

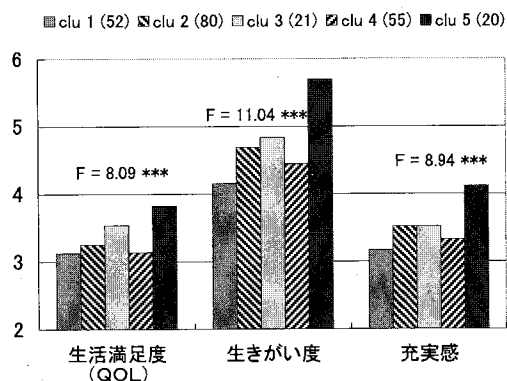


図7 well-being に対する志向性の影響

## 5. レジャー志向性尺度の有効性－統合考察－

最後に、これまでに行われた志向性グループ間の数々の特性比較を今一度総括し、直感的な理解が可能となるよう、概念図式の構築へと繋げていきたい。

表3は、志向性が旅行行動も含めたレジャー生活、そして全般的な well-being に及ぼす影響を検討した結果の概略を図式的に表現したものである。多重比較の結果も可能な限り反映させてある。また、表中の各タイプの配置順については、クラスター分析での抽出順ではなく、左列ほど多くの指標でネガティブ、消極的な状態を示しているグループを配置し、右に行くにしたがって、よりポジティブで積極的な状態を示すグループを昇順で配置している。一覧表に明らかなように、レジャー生活の充実という点では、量的にも質的にもほとんどの項目において、志向性の特徴が強く反映されるという結果であった。右端の「最適型」および

「高活動－対人関係志向型」と、真ん中2つの「自己啓発型」と「低活動－対人関係依存型」の間にはどの観点においても一貫して、絶対的なレベル差が存在しており、これら2つの志向性グループと左端の「消極型」の間にも、多くの場合で統計的有意差が認められている。生活全般の充実度を表す well-being 指標に関しても、この順序性は明瞭に見てとれた。

また、典型的レジャー文脈である旅行に関しても、志向性の「活動性」「主導性」要素の得点が高い「最適型」「高活動－対人関係志向型」の行動が活発・積極的で、意識の面でもより意欲的でポジティブな様子が窺えた。これらのグループは、旅行に、日常生活のストレス回避や癒しの要素を求めることが少なく、旅ならではの新奇な体験や鮮烈・印象深い体験をより強く求める傾向があるようであった。

このように、レジャー志向性尺度は、現在、各

表3 レジャー関連変数及び well-being のグループ間比較の概略

生活の局面	比較項目	消極型 clu 1	低活動－対人関係依存型 clu 4	自己啓発型 clu 2	高活動－対人関係志向型 clu 3	最適型 clu 5
レジャー（全般）	レジャー活動参加度					
	運動・スポーツ	▲	▲	△	○	◎
	外出・行楽・映画	△	○	△	◎	○
	社交・つきあい	△	○	△	◎	○
	見物・観賞	△	△	○	○	◎
	創作・パフォーマンス	▲	▲	△	△	○
	教養・学習	△	▲	○	△	◎
	アウトドア	△	△	○	○	◎
	社会的活動	▲	▲	△	△	○
	活動領域全体	▲	△	△	○	◎
	レジャー生活満足度	○	△	△	◎	◎
	内発的動機づけ	△	▲	△	○	◎
	阻害要因認知(少)	▲	▲	△	○	◎
	好みの旅行スタイル	—	—	—	—	—
レジャー（特殊）旅行	旅行で重視することがら					
	鮮烈体験	△	△	△	○	◎
	視野拡大	○	△	○	○	◎
	交流志向	△	△	△	○	◎
	旅行経験					
	国内旅行回数(過去1年)	△	△	△	◎	◎
well-being	海外旅行回数	▲	△	△	○	◎
	生活充実感	▲	△	○	○	◎
	QOL(生活満足度)	▲	▲	△	○	◎
	生きがい感	▲	△	○	○	◎

◎高レベル    ○中上レベル    △中レベル    ▲低レベル

個人が「消極型」をネガティブエンド、「最適型」を理想像・ポジティブエンドとしたレジャーの充実・深化・発展のプロセスを表す仮想直線上のどのあたりに位置しているのか（すなわち、どのクラスターに属しているか）を、その個人に具体的なイメージを伴って明確に示すことができる有効なアセスメントツールだと評価できるであろう。そして、仮にある個人が、この仮想線の間あたりに位置する「低活動－対人関係依存型」や「自己啓発型」であったのなら、今後の各個人の目標として、より発展した形の「高活動－対人関係志向型」や理想型としての「最適型」の存在を、具体的なイメージを伴って示すことができる。これまでの検証を経て、レジャー志向性尺度は、個人のレジャー生活の到達レベルをかなり正確に予測・診断することができるうえ、今後、各個人が目標とすべきより上位の発展・進化したレジャー生活のイメージも具体性をもって示して見せることができるので、レジャー啓発やレジャー支援の実践場面での利用価値は高いと考える。

以上、志向性グループ間での諸指標に対する比較結果を一通り見てきたが、ここで表3に掲げなかった各グループの年齢、就労状況等基本的属性について若干言及しておきたい。まず年齢について。各グループの平均年齢は「消極型」→「低活動－対人関係依存型」→「自己啓発型」→「高活動－対人関係志向型」→「最適型」の順に、40.15歳（SD＝17.35）、37.53歳（15.26）、42.19歳（14.23）、43.76歳（13.51）、45.75歳（15.49）であり、全体では41.06歳（15.36）であった。「最適型」と「高活動－対人関係志向型」において若干年齢が高く、「低活動－対人関係依存型」で低いという結果であったが、統計的に有意な差は確認されなかった（ $F=1.52$ , n.s.）。就労状況に関しては、「フルタイム」「セミフルタイム」で働いていると回答した人を合わせた“有職－長時間就労者”（それ以外は「パートタイム」「無職」を統合し“無職・短時間就労者”とした）の割合は、「消極型」か

ら順に 42.3%（22）、51.3%（41）、47.6%（10）、38.2%（21）、50.0%（10）であり、年齢が低目であった「消極型」や「低活動－対人関係依存型」の“有職－長時間就労者”割合が若干低いようであった。このことは、年齢に関しても事情は同じで、そのグループに学生サンプルが多く含まれていたことを暗示するものであるが、しかし、統計的に意味のある偏りとは言えなかった（ $\chi^2=2.67$ ,  $df=4$ , n.s.）。

このように、志向性プロフィールに基づいてセグメンテーションした場合、グループ間のレジャー生活の充実度や生活全般にわたる well-being レベルの差異は、志向性に表れた各グループの好みや行動傾向を明確に反映していることが確かめられたが、年齢や就業状況など基本的属性・外的要因の方の影響力は、それに比べるとあまり大きくないことが判明した。

### まとめと今後の課題・展望

本研究における主たる検討課題は、2006年に試作し、その後2007年に新たな視点を盛り込んで再構成した“レジャーに対する好みやレジャー場面における個人の行動上の特徴を把握する”レジャー志向性尺度を、これまで若年層（大学生）に実施して検討してきたところ、これをさらに幅広い年齢層の一般成人女性へと対象を広げて検証作業を行い、尺度の安定性を確認するとともに、アセスメントツールとしての実用性、有効性を確認するということであった。また、これまでの女子大学生を対象とした調査研究では視野に入っていなかった「旅行」行動という新たな、しかし最も人気のあるレジャー行動の状況把握や行動予測の研究においても、志向性尺度が効力を発揮するものなのか確かめる作業も合わせて行った。

まず、第1の志向性尺度の安定性を確認するという課題については、2008年の研究結果とほぼ同様に、尺度の構造は安定しており、信頼性も高

く、各個人のレジャー文脈における諸特性に関する弁別性が非常に高いことを確認することができた。

32 項目からなる志向性尺度に対し、因子分析を行ったところ、2008 年の研究と内容的にはほぼ同一の 6 要素—(1)「長期的展望・向上」(2)「活動性」(3)「主導性」(4)「対人関係志向」(5)「利他主義」(6)「自然志向」—から構成されることが明らかになった。抽出順も、2 要素が異なるだけで、その他は同じであった。5 次元を想定して尺度を試作した 2006 年の研究（この時、利他主義は含まれていない）でも、全く同様の因子構造を示していた。また、信頼性の指標である下位尺度の内的な一貫性についても、クロンバックの  $\alpha$  係数は第 I 因子から第 VI 因子までそれぞれ、.839, .776, .769, .706, .760, .764 であり、第 III 因子以降は、構成項目数が 4 であることから判断すると、十分に内的一貫性は高いと言えた。

第 2 の課題—尺度の内容面での有効性を見積もる—に関しては、この 6 因子の因子得点を用いたクラスター分析により、レジャー志向性についての特性・固有性を最大化するよう全サンプルのグループ分けを行ない、各グループ間でレジャー生活の充実度などを比較していった。

クラスター分析によるセグメンテーションの最適解として、「消極型」(cluster 1), 「自己啓発型」(cluster 2), 「高活動—対人関係志向型」(cluster 3), 「低活動—対人関係依存型」(cluster 4), 「最適型」(cluster 5) といった 5 つのグループを抽出した。

レジャー生活の充実度を量的・質的に把握する数々の指標や生活全般にわたる well-being の状態などを 5 グループ間で比較したところ、大半の観点において、得点や水準に関して差異が認められ、なおかつ、「最適型」(clu 5)→「高活動—対人関係志向型」(clu 3)→「自己啓発型」(clu 2)・「低活動—対人関係依存型」(clu 4)→「消極型」(clu 1) という順序性が一貫して保たれていた。

レジャー志向性尺度は、レジャー生活や生活全般の充実度の水準を一貫して、ぶれることなく安定して弁別していることが明らかになった。この高い弁別力が、志向性尺度の有効性を裏づける証しだと評価してもよいであろう。

さらに、実践的・応用的観点からも志向性尺度の可能性が示された。志向性のどの要素の得点が高く、どの要素が低いといったプロフィールに注目することで、現在、ある個人がレジャーの発展プロセス上のどの段階に位置しているのか（どのタイプに当てはまるか）を明示することができる。最もネガティブな状態に止まっている「消極型」と評価されたなら、将来の方向性として、あるいは到達すべき目標地点として、残りの 4 タイプのイメージを提示することができる。漠然とした、抽象的なアドバイス・情報ではなく、調査データに裏打ちされた各タイプの具体像がモデルとして示されるので、目標をもちやすく、アドバイスとしても格段に効果の高いものとなるだろう。このように、各個人に、発展プロセス上の位置を指し示すことができるという志向性尺度の特徴は、実践場面での使用を強く後押しするものと言えるだろう。

また、本研究での新たな試みであった、「旅行」という重要なレジャー文脈に対する志向性尺度の応用という点についても、ある程度、納得のいく結果を得ることができたと考えている。

一方、今後に残された課題もある。2008 年の研究と今回の結果を照合してみると、志向性に基づくセグメンテーションの結果、今回も同じく 5 グループを抽出しているが、その全てが前研究の 5 グループと一対一に対応しているのか、あるいは似通った特性・傾向性をもつのかといえは、そうではなかった。この点が、もう一度、より系統的にサンプル抽出を行った調査によって確かめられるべき点と考える。「消極型」「最適型」の 2 つは 2008 年の研究においても確認されており、そのグループが示す好みや行動傾向もほぼ一致し

たものとなっている。最も発展・成熟した理想型としての「最適型」、逆に最も未熟・成長途上のネガティブエンドに位置する「消極型」という図柄である。しかし、その中間の3グループの分け方をみると、必ずしも同じ特性をもったグループとは言いがたかった。2008年の分析における中間3グループはポジティブな方から「自己啓発型」「平準型」「自己中心／現在志向型」であったのに対し、今回の分析では、「高活動－対人関係志向型」「自己啓発型」「低活動－対人関係依存型」となっていた。同じ名称の「自己啓発型」が抽出されたものの、グループの特性はかなり異なった印象を受けた。先年度の分析では、「自己啓発型」が「最適型」に続くポジティブな特徴を示していたが、本分析では、「自己啓発型」の相対的ランクはもう一段低いものとなっていた。このことから、2つの分析で得られた同じラベルの“自己啓発型”も、様々な面を総合的に勘案すると、ほとんど別の性質をもったグループであったと結論することができる。

この2つの研究における中間3グループの性質上の不一致の原因を今後解明していく必要があるだろう。主たる理由は、サンプル構成の違いによるものなのだろうか。系統的なサンプリングにもとづいた調査を計画し、この点について詳しく検討していく必要がある。

また、今後、レジャーをめぐるより多くの鍵概念間の相互関連のプロセスを明確化し、包括的・複合的に検討していくためには、構造方程式モデリング等の手法を用いて、様々な理論モデルの探索とその性能評価を同時に行う研究へと発展させていくことが望まれる。

以上、志向性尺度の安定性・有効性の確認は一応の成果を見ることができた。今後は、この志向性尺度に加えて、新たな、レジャー生活のアセスメントツールの開発と、有効概念の探索に継続的に取り組んでいきたい。今、アセスメントツール開発研究の領域で最も関心を集めているのは、阻

害要因を調整するノウハウ（工夫）とその実行力を表す概念である、“コンストレイント調整”というコンセプトである。今後は、志向性尺度も有効に利用しつつ、包括的・複合的なアセスメントツール開発に努めたい。

## 引用・参考文献

- Coleman, D. J., & Iso-Ahola, S. E. (1993). Leisure and health: The role of social support and self-determination. *Journal of Leisure Research*, 25, 111-128.
- Crawford, D.W., Jackson, E.L., & Godbey, G.C. (1991). A hierarchical model of leisure constraints. *Leisure Sciences*, 13, 309-320.
- Ellis, G. D., & Witt, P. A. (1994). Perceived freedom in leisure and satisfaction: Exploring the factor structure of the perceived freedom components of the leisure diagnostic battery. *Leisure Sciences*, 16, 259-270.
- Ellis, G., & Witt, P. A. (1984). The measurement of perceived freedom in leisure. *Journal of Leisure Research*, 16, 110-123.
- Graef, R., Csikszentmihalyi, M., & Gianinno, S. M. (1983). Measuring intrinsic motivation in everyday life. *Leisure Studies*, 2, 155-168.
- 堀洋道（監）山本真理子（編）（2001）. 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る＜自己・個人内過程＞サイエンス社, 29-31.
- 堀洋道・山本真理子・松井豊（編）（1996）. 心理尺度ファイル—人間と社会を測る— 垣内出版, 209-212.
- Hubbard, J., & Mannell, R. C. (2001). Testing competing models of the leisure constraint negotiation process in a corporate employee recreation setting. *Leisure Sciences*, 23, 145-163.
- Iso-Ahola, S. E., & Weissinger, E. (1990). Perception of boredom in leisure: Conceptualization, reliability and validity of the Leisure Boredom Scale. *Journal of Leisure Research*, 22, 1-17.
- Iwasaki, Y., & Mannell, R. C. (2000). Hierarchical dimensions of leisure stress coping. *Leisure Sciences*, 22, 163-181.
- Jackson, E. L. (1993). Recognizing patterns of leisure constraints. *Journal of Leisure Research*, 25, 129-149.



- Jackson, E. L. (1988). Leisure constraints: A survey of past research. *Leisure Sciences*, 10, 203-215.
- Jackson, E. L., Crawford, D. W., & Goodbey, G. (1992). Negotiation of leisure constraints. *Leisure Sciences*, 15, 1-12.
- 前田勇・佐々木土師二 (監) 小口孝司 (編) (2006). 観光の社会心理学: ひと, こと, もの—3つの視点から 北大路書房.
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- 佐橋由美 (2008). “最適な” レジャースタイルを特徴づける中核要素としての志向性概念の検討 大阪樟蔭女子大学学術研究会 人間科学研究紀要, 8, 25-37.
- Sahashi, Y., & Sato, K. (2007). The development of the Leisure Orientation Scale. *Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007 Program and Abstracts*, 117-118.
- 佐橋由美・多留里香 (2006). レジャー志向性尺度の開発に関する研究, 日本レジャー・レクリエーション学会第36回大会発表論文集, 106.
- 佐々木土師二 (2007). 観光旅行の心理学 北大路書房.
- 佐々木土師二 (2000). 旅行者行動の心理学 関西大学出版部.
- 佐藤文子・田中弘子・斉藤俊一・山口浩・千葉征慶 (編) (1998). PIL テストハンドブック I ~ IV・別巻 システムパブリカ.
- Son, J. S., Mowen, A. J., & Kerstetter, D. L. (2008). Testing alternative leisure constraint negotiation models: An extension of Hubbard and Mannell's study. *Leisure Sciences*, 30, 198-216.
- Weissinger, E., & Bandalos, D. L. (1995). Development, reliability and validity of a scale to measure intrinsic motivation in leisure, *Journal of Leisure Research*, 27, 379-400.
- Weissinger, E., Caldwell, L. L., & Bandalos, D. L. (1992). Relation between intrinsic motivation and boredom in free time. *Leisure Sciences*, 14, 317-325.
- Witt, P. A., & Ellis, G. D. (1989). *The leisure diagnostic battery: Users manual*. State College, PA: Venture Publishing Inc.
- Witt, P. A., & Ellis, G. D. (1985). Development of a short form to assess perceived freedom in leisure. *Journal of Leisure Research*, 17, 225-233.
- Witt, P. A., & Ellis, G. D. (1984). The leisure diagnostic battery: Measuring perceived freedom in leisure. *Society and Leisure*, 7, 109-124.

# 資 料

付表1 レジャー活動分類表

中分類		中分類	
No	小分類	No	小分類
<b>【1】マスメディア</b>		<b>【6】見物・観賞</b>	
1	1) テレビを見る	28	1) コンサート・観劇(舞台)
2	2) 新聞・雑誌を読む	29	2) 美術館
3	3) ビデオ・DVDを見る	<b>【7】文化的活動—創作・パフォーマンス</b>	
4	4) 音楽を聴く(CD・MDなど)	30	1) 楽器演奏
<b>【2】運動・スポーツ</b>		31	2) 歌・コーラス
5	1) スポーツ観戦	32	3) 手芸
6	2) 健康運動(体操・ヨガ・筋トレ・ジョギングなど)	33	4) 絵画
7	3) ダンス・舞踊・太極拳など	34	5) 工芸(陶芸など)
8	4) 本格的な競技スポーツ	35	6) 文芸(エッセイ・俳句・短歌など)
9	5) レクリエーションスポーツ・軽スポーツ	36	7) 写真・ビデオ制作
<b>【3】外出・行楽・映画</b>		37	8) おけいこごと(華道・茶道・日舞など)
10	1) ウィンドウショッピング・ぶらつき	<b>【8】教養・学習</b>	
13	2) イベント・テーマパークなどへの外出	38	1) 学習(語学など)
14	3) ドライブ	39	2) 資格のための勉強
27	4) 映画	40	3) カルチャーセンター・研修会などへの参加
<b>【4】社交・つきあい</b>		41	4) 読書
15	1) 友人と外食	<b>【9】動植物の世話</b>	
16	2) お酒を飲みに行く	42	1) ガーデニング(家庭菜園を含む)
17	3) 友人宅訪問	43	2) ペットの世話(散歩を含む)
18	4) カフェ・喫茶店での会話	<b>【10】野外活動</b>	
19	5) 電話	44	1) 野外活動(ハイキング・キャンプ・山菜採り)
20	6) メール	45	2) 野外スポーツ
21	7) 手紙	11	3) 散策・散歩
22	8) カラオケ	12	4) 日帰りの行楽
<b>【5】パソコン</b>		<b>【11】社会的活動</b>	
25	1) パソコンいじり	46	1) ボランティア活動
26	2) インターネット	47	2) 生協やPTAなどの組織的活動

※活動参加度は、11の活動領域(中分類)の平均値や、全領域45活動種目(小分類)の平均値を用いる。  
 ※※質問紙のNo.23(ゲームセンター・パチンコなど)、No.24(室内ゲーム(テレビゲームなど))は分析から除外している。

付表2 旅行の際に重視することがらに対する因子分析の適用

項目 No	質 問 内 容	第Ⅰ因子 鮮烈体験	第Ⅱ因子 視野拡大	第Ⅲ因子 交流志向	第Ⅳ因子 快適生活	第Ⅴ因子 リラックス
16	非日常的体験をする	.796	.207	.135	.113	.012
15	人生観が変わるような鮮烈体験をする	.783	.348	.179	-.006	.039
17	スリルや冒険を体験する	.684	.159	.190	.066	-.022
6	ワクワク心躍る面白い体験をする	.585	.105	.250	.313	-.026
12	見聞を広め知識を豊かにする	.174	.858	.189	.031	.173
13	自分の世界・視野を広げる	.295	.809	.151	.045	.119
11	訪問先の文化や自然について学ぶ	.146	.806	.187	.029	.034
14	主体的・積極的に行動する	.454	.540	.131	.062	.007
9	新たな人間関係を求める	.215	.228	.958	.016	.047
10	幅広く広範囲の人と交流する	.330	.287	.611	.105	-.007
8	人間関係を深める	.257	.171	.591	.360	.134
5	おいしいものを食べる	.044	-.052	-.002	.739	.228
4	楽しいことをする	.278	.140	.121	.662	.091
7	よいサービスを受ける	.006	.015	.099	.591	.147
3	心身の健康を回復(リフレッシュ)する	.130	.126	.097	.201	.730
1	のんびりリラックスする	-.198	.081	-.002	.133	.621
2	日常生活の責任を忘れる	.054	.028	.014	.110	.619
	平方和	2.76	2.74	1.93	1.67	1.45
	寄与	16.2	16.1	11.4	9.8	8.5
	累積%	16.2	32.4	43.7	53.5	62.1

# The Development of the Leisure Orientation Scale: Examining its Stability, Practical Effectiveness, and Application of the LOS to Predicting Travel Behavior among Adult Women.

Osaka Shoin Women's University  
Yumi SAHASHI

## ABSTRACT

The main purpose of present study was to examine the stability and practical effectiveness of the Leisure Orientation Scale that was pilot-designed in 2006 and elaborated in 2007. Moreover, was a secondary goal, to investigate the possibility of its application to other leisure context, or travel behavior. The 32-item Leisure Orientation Scale was incorporated into a survey questionnaire consisting of other scales that assess, not only such leisure-specific variables as amount of leisure participation, strength of motivation, leisure satisfaction and perception of leisure constraints, but grasp overall well-being, such as life satisfaction or QOL; and was implemented to the adult women of 20 years and over (including college students) (N=228). An exploratory factor analysis was performed in order to examine the stability of factor structure of the LOS. Six factors emerged as follows: (1) long-term perspective/ personal growth (2) vigorousness (3) leadership (4) sociableness (5) altruism, and (6) nature-oriented. The internal consistency coefficients (Cronbach's alpha) for the subscales were acceptable as they ranged from .839 to .706. In the next stage of analysis, based upon the subscale-scores, all subjects were divided into several different groups reflecting their own characteristics or profile of leisure orientation using a procedure of hierarchical cluster analysis. Five types of groups were identified, and were compared to each other concerning levels of leisure participation, leisure satisfaction, intrinsic motivation, perception of constraints in free time, and even the level of overall well-being. Furthermore, respondents' favorite travel styles, important elements during their travels, and frequency of foreign/domestic travels were also compared among the five orientation groups. The results indicate that "optimal" type showed the most desirable leisure life style (including travel context) and the highest level of psychological well-being, whereas "passive" type indicated the most inactive participation in leisure, lack of motivation, lowest leisure satisfaction and the lowest level of well-being. A series of statistical analyses revealed that leisure orientation construct contributed to assess the extent of enrichment of individuals' leisure lives, and even estimate the level of their overall quality of life. The Leisure Orientation Scale seems to be an effective tool for assessing people's leisure life situations within the context of leisure consultation and adult leisure education.

**Keywords:** development of leisure assessment instruments, Leisure Orientation Scale, stability and practical effectiveness of LOS, travel behavior prediction